

対魔忍 Another Story *X*

時をかけた異なる代償



無断転載 & 稲^キ方
AI学習禁止
Unauthorized Reproduction
and
AI Learning Prohibited

「んあッ♡はああッ♡♡♡! くはあ……」

（な　なに!!　い　いったい　何をされたの!!）



荒廃した世界でも変わらぬ潮騒、
その音色に耳を傾けながら鼻歌交じりに浜辺を散歩するのは

水着姿の対魔忍 水城ゆきかぜ。

彼女は上機嫌だった、
なにせ昼間過去から呼び寄せたふうまの協力でマーメイドを倒したからだ、

（やつぱりふうまの指揮はいいわよね）

自分が手を焼いた敵の能力を思わぬ戦法で打開し自分の力を十全に発揮させてくれる
彼の指揮はありていに言えば、
気持ちよかった。

「むふふ」

それに気持ちよかったといえは
その後にも良かった……

過去の自分と愛しの彼に愛してもらった、
新鮮で刺激的な体験を思い出すとつい頬が緩む。

相棒のアスカが今の顔を見たら、
きつとぎもちわるっなどと言われかねない顔をしているが、
幸いハツカゼも先に帰しており、
浜辺にはゆきかぜ二人だった。

「さて 帰りますか ……ん？」

陽も沈み周りが暗くなったので帰ろうとするゆきかぜだったが、浜辺から少し離れた岩場で何か大きなものが動いた気がした。

（マーメイド……なんで!?)

目を凝らすとそれは昼間に倒したマーメイドだった。少し姿や大きさは違うようだったがあれだけ手を焼いたブレインフレイヤーだ、見間違いでは無い。

ゆきかぜは慎重にマーメイドの後を付けると丁度大きい岩に隠れ死角になった所に洞窟の入り口があり、そこにマーメイドが入っていった。

（アイツら性懲りもなく……）

折角のいい気分を台無しにされうんざりした気分になるゆきかぜ、

だが一度倒した敵だ、手の内は分かっているし野放しにする道理は無い。

警戒しながら洞窟の奥へと進むゆきかぜだったが、突然視界が真っ暗になる、

そして明るくなったと思った時には…

すでに手遅れだった――。

「はぁ……くはっ
あぁっ！」

（わ……わたし
なんで!!）

また
イカされた!!





目の前が明るくなって最初に目に写ったのは
洞窟の壁面、
だが直後に視界は真っ白に染まり
体は電流を流された様な衝撃に晒された。

そして体中が触手に絡めとられ動けず、
しかも何故か体が痺れて力が入らない事に気付く、

あまりの予想外の事態に混乱するゆきかぜ、

随分と時間が掛かったがなんとか状況を分析するに
自分の体が絶頂し体が快感に蕩かされた時の様な
状態になっていると理解できた。

このつ
離せッ!!

額のあそこが光ったら
大撃が……)



「やめろ!! やめッ……」

(はやくっ……だっしゅっ……)





「はあ あぐっ

んはあ……」

（くそ……なんでこんな奴に……
イカされ……）

「ハ……ははは
雷神……」

良い声で鳴くじゃないですか



「よくも私のマーメイドをやってくれましたね
でもまんまと1人で敵地に取り込んでくるとは
しかも厄介な風神はいない様子

これは僥倖」

「くっ!? お前 誰だ!!」

「オホ... ガハハ そんなことに素直に
答えると思われてるとは舐められたものです」

「はあっ!? 姿も見せられない
名乗れもしないなんて随分チキンな
ブレインフレイヤーね」



「なに!？」

「なによ そのとおりじゃないこのザコー!ミジンコ!」

「きさま!! 調子に乗るなよ! 自分の状況がわからないのですか!!」

「よし ひっかかった」

「今のうちに……」

マーマイドから機械音声のような声が発せられる、加工された声で正体までは判別できないがブレインフレイヤーなのは明白だ、なのでゆきかぜはマーマイドの向こうにいるブレインフレイヤーを挑発する事にする。

その隙に左手に力を集めこの状況を脱する作戦だ、

そんなゆきかぜの思惑にブレインフレイヤーが簡単に引っ掛かり、ゆきかぜも売り言葉に買い言葉でマーマイドを挑発し続ける。

それは短い時間だったが今のゆきかぜには十分な雷の力が溜める事ができる時間だった。



「いい加減生臭いのよ！
これでもく……」



「オホホホ 馬鹿な対魔忍
まだ勝ち目があると思っ
ているなんてね」



「このマーメイドはあなた達が時間を移動し
テセラックを壊した事にヒントを得て開発した
時間を操作する能力を持つマーメイドなのです」

「と言ってもこの能力はまだ実験途中
過去に戻るところか止めることも出来ず

予め設置したフィールド内の触れているものの
時間を一時的に鈍らせることしかできません

でもあなた二人ならそれで十分」



「……」

（マジック！
間にあえ……）

またあれだつ

ズ
ン
ン

ズ
ン

ガ
ン

「今あなたの時間を千分の二に遅くしています
反撃の為に蓄えた雷撃でしようがお見通しです
吸い取らせてもらいますよ」

「といつてもあなたにはこのマーメイドの姿も声も千倍の速度で見え聞こえているから何をされているかも知何を言われているかも知分からないでしょうがね……」

「いかに雷神といえど時間を操られては何も出来ないでしょう」

「こうやって体を好き放題に嬲られても何も出来ずすすべなく力を奪われ突如襲い来る千倍以上の抗えない感覚に晒されるのです」

「でも折角まんまと一人でやってきた初めての実験台ですもう少し楽しめるように特性媚薬を吞ましてあげましょう」

「さあもうすぐ時間が戻りますよ……」







マーメイドの謎の攻撃の兆候を察し雷撃を放とうとするが、
マーメイドの真の能力に気付いていないがゆえに
回避不能な快楽攻撃に絶頂するゆきかぜ、

貯めた力も無くなり
いつの間にか口に挿入された触手に絶頂させられ舌が痺れてだらしなく唾液を
垂らしたまま戻す事が出来ない。

「ふほ……へ」

「いっ……いたいどうれば
この攻撃をふせげるの……」

額が光った直後マーメイドの体が歪む様から
ゆきかぜはこのマーメイドには特殊な振動を発生しそれを快感に変換し
敵の体に与える能力があると分析していた。

この攻撃を受ける度に体が芯まで痺れ力が入らず、
どんどん甘い熱が膨らみ収まる気配がない、

おそらくあの攻撃を受け続けると、
こんな異常な快感を受け入れさせられるのだろう
だから一刻も早く脱出しなければと思うが、

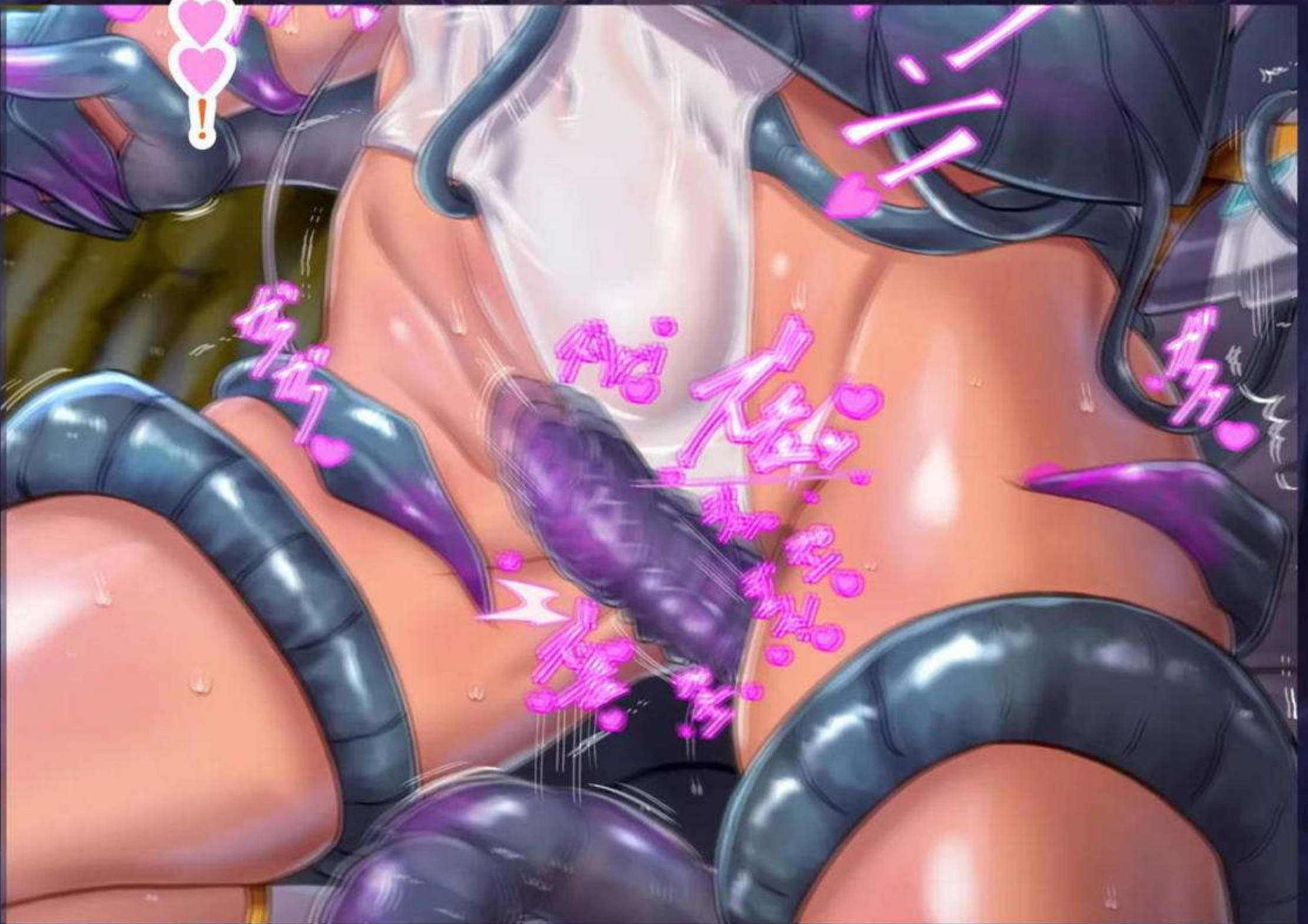
マーメイドがゆきかぜの回復を待つことは当然無い。



ふあんッ♡♡♡♡♡
ひやめへッ♡♡♡♡♡

こする…♡♡♡♡♡
だめッ♡♡♡♡♡
なあ

ふああッ♡♡♡♡♡
ふああッ♡♡♡♡♡
ふああッ♡♡♡♡♡



ふああッ♡♡♡♡♡
ふああッ♡♡♡♡♡
ふああッ♡♡♡♡♡



「あ♡♡♡

あがあ

らめ

ふと……い……」

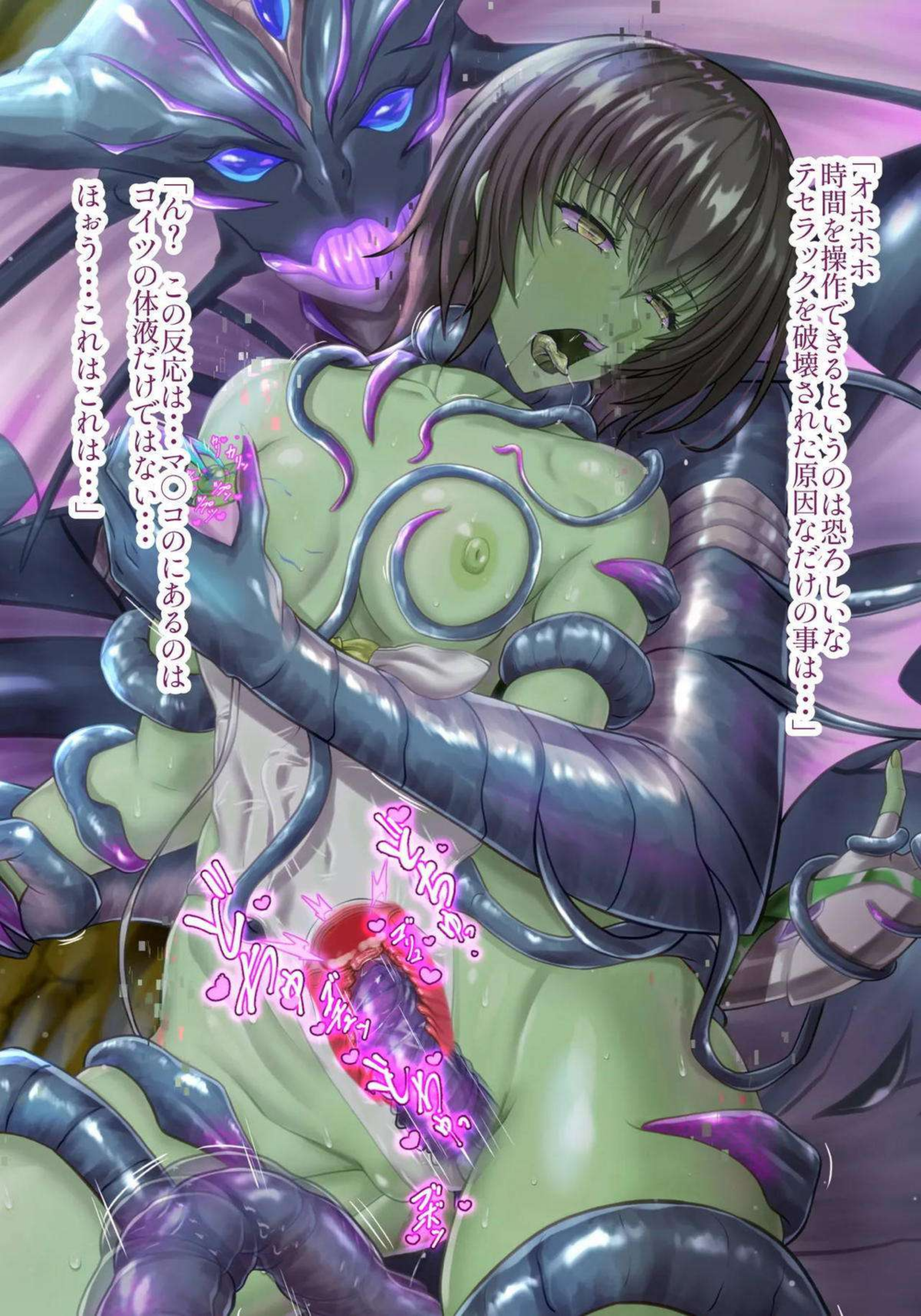
「マーマイドが太い触手がゆきかぜの股間を激しく擦る、イボイボが往復する度に快感が弾け、これまでに積み重ねられた快感に上乗せされるように何度も軽い絶頂を味わわされ、追い詰められたゆきかぜのビチャビチャに濡れたアソコにそのままの流れで触手が挿入された、

愛液で濡れたマ○コはヌメヌメの触手を容易く受け入れてしまい、野太い剛直が下腹部をボコりと膨らませる。

重く突きあげられた衝撃と一拍遅れてやってきた快楽に意識が飛びそうになり、マーマイドの次の動向など気に留める余裕は無かった。

「オホホホ
時間を操作できるといふのは恐ろしいな
テセラツクを破壊された原因なだけの事は……」

「ん？ この反応は……マ○コにあるのは
コイツの体液だけではない……
ほおう……これはこれは……」





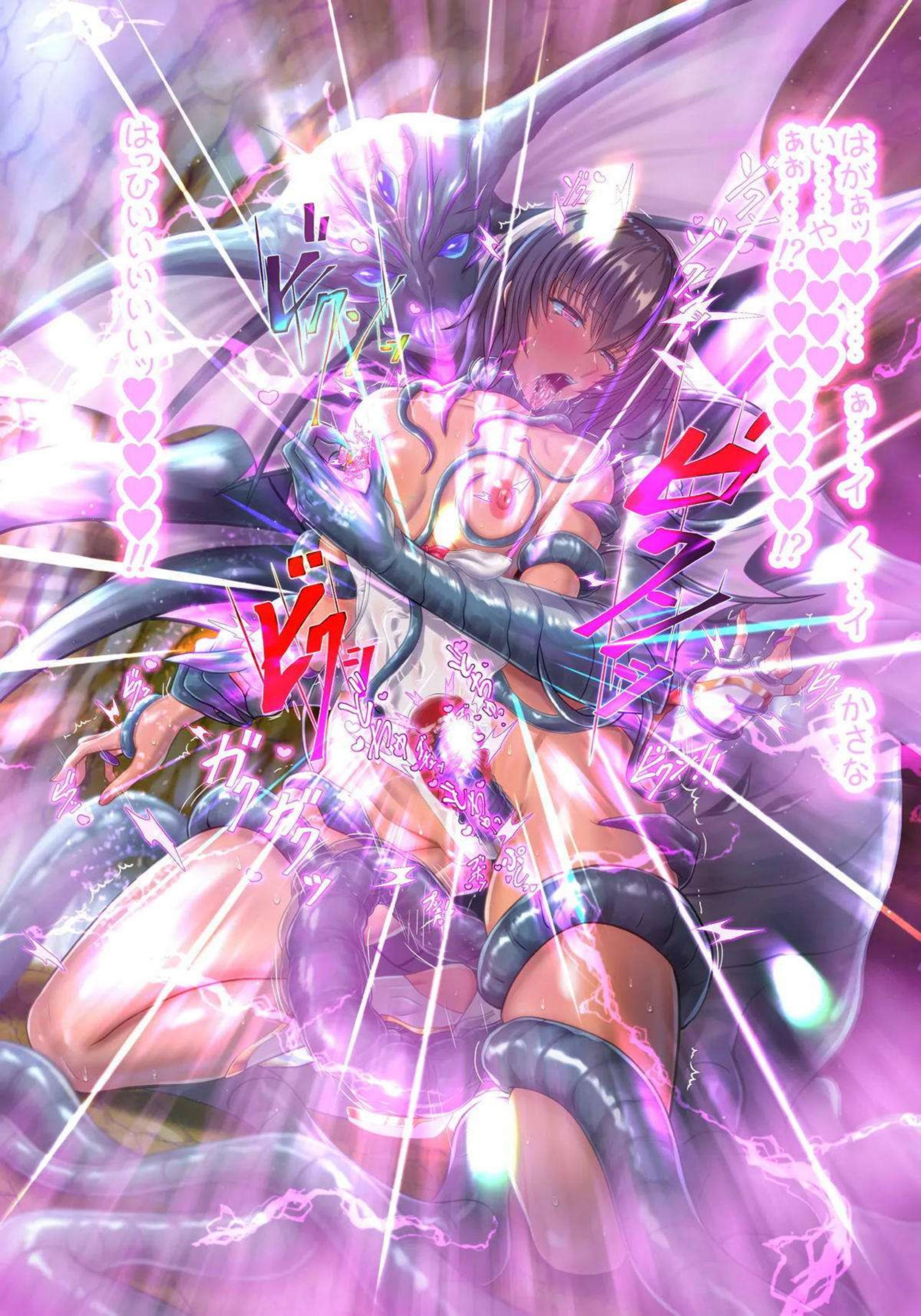
はぁん♡♡

（だめ 全然抗えない それどころか
 イったまま……おりにこない……
 このままじゃ……だめだ……）



「へっ!? いやっ やめてッ
まだ おさまってないっ!
連続でなんて
やめろあつ!」
おかしくなっちゃう





「すっかり大人しくなりましたね雷神
何度も媚薬を注入した乳首もプツクリと膨らんで…
だらしない淫売の本性が
この異常な快楽を受け入れているようですねえ」

「んあ
はあ
そんないんな事…
な
おふっ♡♡♡♡♡

「こんな太いものを出し入れされて絶頂しているのが
その証拠でしょう」

「…ところで話は変わりますが
我々はテセラックを
再び蘇らせようとしています」



「ですがあれだけの物を
再現するのは非常に難しい状況です

ですが何故でしょう？」

あなたの膣内や体中に付着している男の精液と
あなたのもののようであなただけの物じゃない体液から
失われた筈の
テセラツクの気配をわずかに感じるのですよ……」

『……何故でしょうねぇ？』



「ッ!!」

暴虐的快樂に蕩けきったゆきかぜだが
ブレインフレイヤーの言葉で背筋に強烈な寒気が走る。

対魔忍の勘のようなものが
激しく警鐘を激しく鳴らしている、
脳裏によぎるのは
昼間のふうまと過去の自分との情事。

そして過去のふうまはこの世界の人間ではなく
しかもテセラックの破壊の近くにいた、
なんらかの影響が残っていてもおかしくはない存在ではある……。

「あ……
や
やめ……」

電光石火で導きだした最悪の
可能性を否定せねばと思った、

しかし彼女の口から出てきたのは
マーメイドの額の発光から始まる暴虐を弱々しく
拒否する言葉だけだった。

「……この精液は過去……いや別の世界の
時間軸のもの……
体液は……これはもしかや別時間軸の雷神……」

「……は!!」





「やめ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

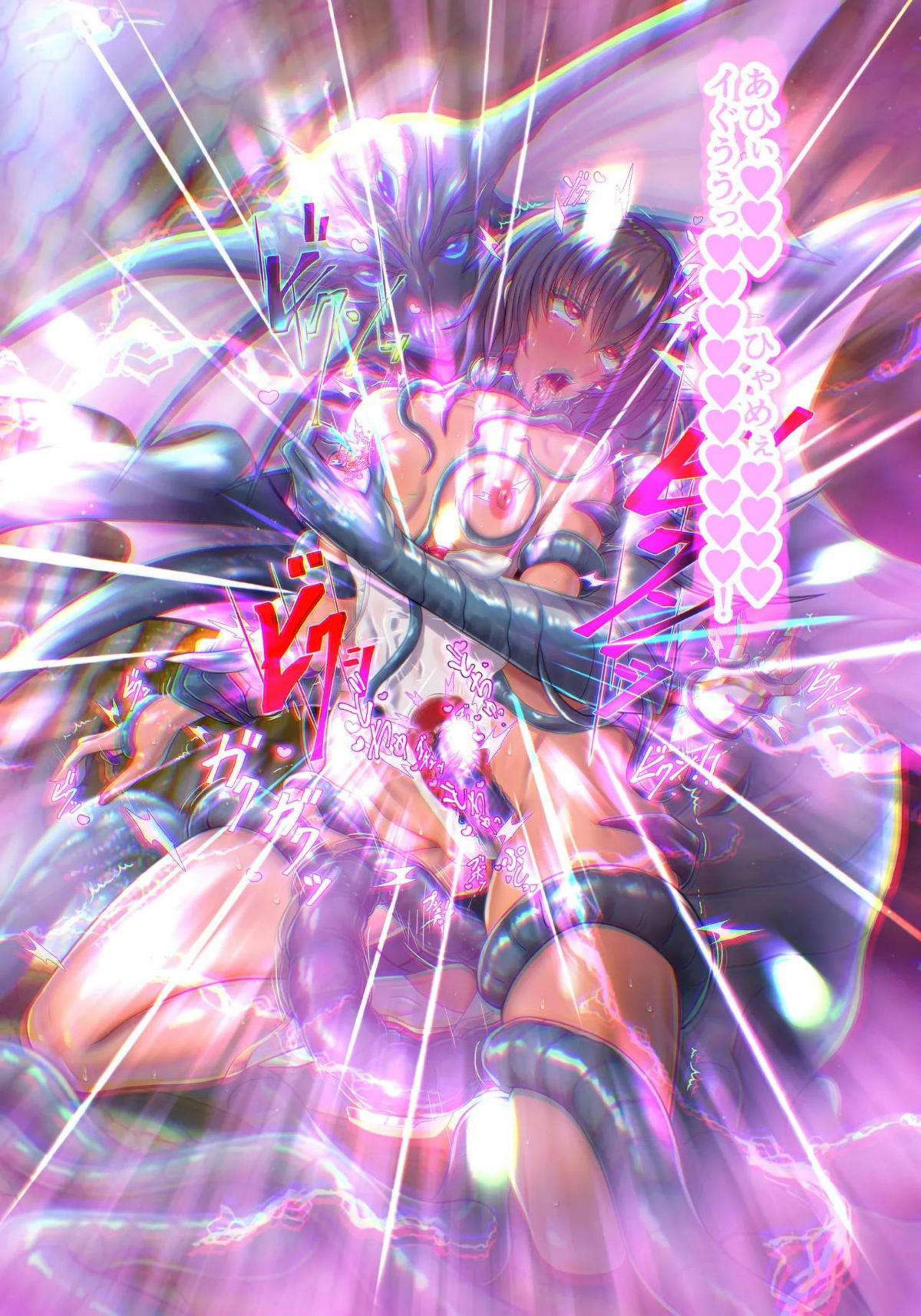
「おっほおっほ」

「おっほおっほ」

「...もしやテセラックがまだ手に入っていない
過去には破壊されていないというところか？」
事象が残る可能性があるということですか!？」

「これは興味をそそられます
この異分子の体液を徹底的に回収しましょう」





「子宮の中も体からも隅々まで回収しましたよ」

「では最後に子宮にたっぷり射精してあげましょう
愛しの男の精液を汚されたと思いい込みながら
果てなさい」











「んっー♡♡♡んっー♡♡♡ん!!」

(ああうめ
いがづちが
わらしの
また…
うばわれる…)

(いやあ
うばわないれ

きもちよくしないれ…)

ズン

ズン

ズン

ズン
ズン
ズン

ズン



あの後ゆきかぜはブレインフレイヤーに捕らわれ、
奇怪なオブジェに固定され身体に幾つもの機械を
取り付けられた。

背中に違和感を感じるが全身は肉の膜で
ピッタリと覆われており
装置で見えない指先一本彼女の自由にはならず
どうする事も出来ない。

この膜はあの惨劇をブレインフレイヤーに降る事で
生き延びた裏切りの対魔忍の術を
利用し作ったもので、
肉膜が皮膚と融合しており自力での脱出は
完全に不可能だった。

対魔忍だからこそ理解できてしまう
術に取り込まれている実感と、
皮膚感度を数千倍に高められ、
奇妙な虫に体中を這い回られるだけで
くすぐったさよりも強烈な快感を感じ、

同時に膣奥まで抉りまわす
装置の単調な抽送にすら耐える事も
出来ず激しい絶頂を迎えてしまう。

そしてゆきかぜが屈辱的な敗北絶頂を
迎えると彼女を捕らえる機械と生物が交じり合った
装置が発光を始める、

その輝きは雷神の雷、
ゆきかぜから発せられる雷の輝きは
絶頂によつて装置に吸収され
部屋の各所に剥き出しになったパイプへと
流されていた。

ゆきかぜの雷の力は現在ブレインフレイヤーの
施設を動かす電力として利用されているのだ。

ある日ブレインフレリヤリが上機嫌に見せてきた者、それは捕らえてきた対魔忍だった。



自分のように肉の膜に包まれた舞と蛇子は背中や後頭部に直接パイプやケーブルを繋がれている、時折ピクリと動くので生きてはいるようだったが、意識があるかどうかは分からなかった。



曰くブレインフレリヤリは捕らえたゆきかぜから抽出した対魔粒子、そして過去の世界のゆきかぜの体液と過去のふうまの精液に含まれたテセラックの残滓を使い対魔忍の対魔粒子を、一時的に無効化する兵器を作り出したというのだ。

この事実には衝撃を受けるゆきかぜ、

壁面にオブジェのように飾られる仲間に対し
自責の念に駆られるが今の自分には成す術が無い。

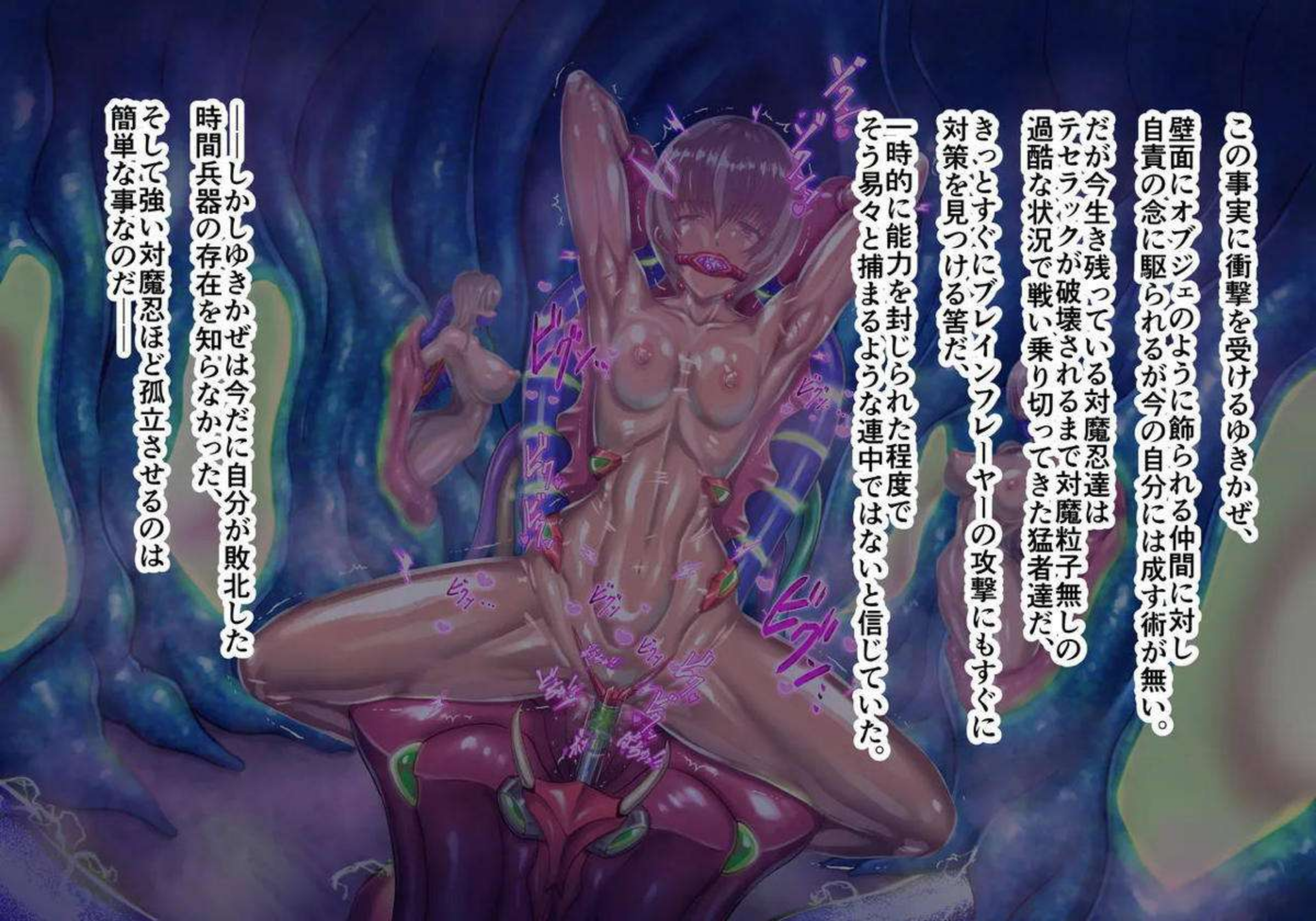
だが今生き残っている対魔忍達は
テセラックが破壊されるまで対魔粒子無し
の過酷な状況で戦い乗り切ってきた猛者達だ、

きつとすぐにブレインフレイヤーの攻撃にもすぐに
対策を見つける筈だ、

一時的に能力を封じられた程度で
そう易々と捕まるような連中ではないと信じていた。

——しかしゆきかぜは今だに自分が敗北した
時間兵器の存在を知らなかった、

そして強い対魔忍ほど孤立させるのは
簡単な事なのだ——



日を追うごとにあの惨劇を乗り越えた盟友達が
バキ、ユルム、バツクされ次々と運ばれ、
次々と歴戦の対魔忍が壁面に取り付けられていく。



かつては凌ぎを削ったライバル、
仲良く喧嘩できる悪友、
尊敬する先輩、



そんな共に戦ってきた仲間達が自分の失態で
無残な姿にされてしまった事に、
ゆきかぜの心は張り裂けそうだった。



だけどそれでもゆきかぜは
まだ最後の希望を失っていなかった、

自分の相棒、

風神雷神の片割れの存在だ、

アスカならきつとこんな絶望的状况でもなんとかしてくれる、
これまでの付き合いで培った絶大な信頼に、
ゆきかぜは最後の一线を保っていた。



「今はボロボロですが
あなたの古傷と同様に
しっかりと綺麗な体に仕上げて飾りますからね」



流石は風神
随分と悪あがきをされました
一度殺してしまつたのですが
しっかりと蘇生と治療をしておきました」

「ようやく捕らえる事に成功しました」



(ああ...そんな)

「これでブレイクシンフレイヤーに立てついた
主要な対魔忍は全員捕らえました」

後はあなた達の対魔粒子で新たなテセラックを
作り出し全での対魔忍を殲滅するだけです」

「計画には大量のエネルギーが必要でしょうが
幸いここには電力に火力などの
様々なエネルギーがより取り見取りです」

「あなた達は死なせません
死す権利すら奪われたその姿で
いつまでもこの施設のエネルギー源として
利用してあげましょう
オホホホホッ！」



(もう……だめだ……)

アスカの痛々しい姿に遂にゆきかぜの心は崩落する、

目頭が熱くなるが肉の膜に捕らわれている瞳から涙が流れる事は無い。

過去の人間への接触は避ける――

仲間から何度も言われていた、

でもいざ彼を目の前にして我慢ができなかった、思いがあふれて止まれなくなっていた。

あの時、浜辺に過去から彼を呼び出し、抜け駆けをしたのはほんの出来心だった、

あの時出来なかった、叶わなかった恋心を少しだけ叶えたかった。

それだけなのに……その所為で全てが終わってしまった。彼に求められて何も考えられなかった

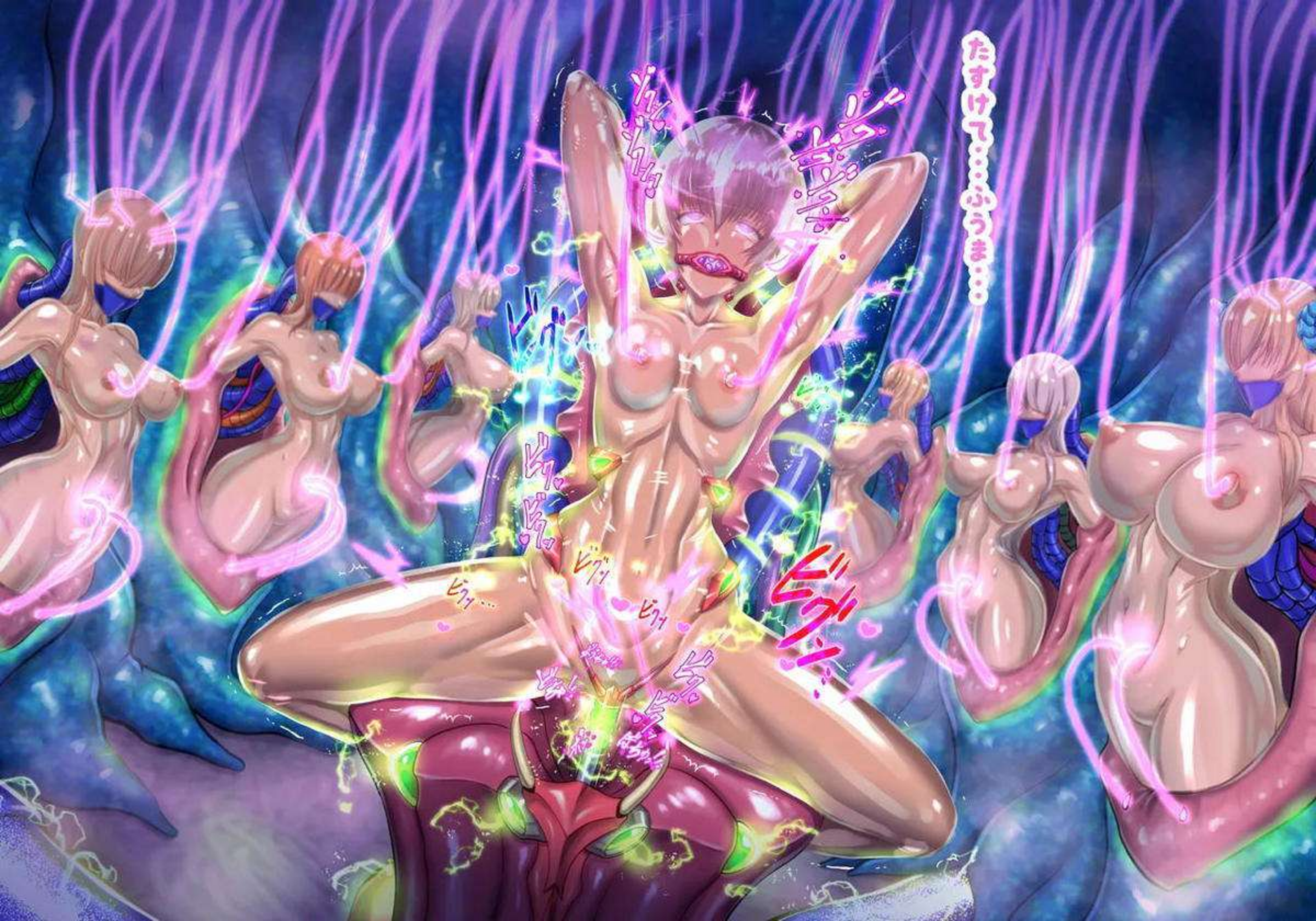
その結果が今だ。

もう誰の助けも期待できない、

――でももしかしたら――

ゆきかぜはそんな敵わない願いをいつまでも心の中で唱え続けた……。





たすけて……ふっま……